

持っている力を少しでも発揮して 安定して生き生きと活動する子

平 尾 マ ミ

てんかんという障害のため学習や生活のリズムが体調や気分によって左右されやすいという特性を持つA児は、入学年度である昨年は環境の変化や新しい生活リズムの違いから、また障害からくる発作のため体調を崩しやすく、本児の積極的に意欲を持って様々な事に取り組もうとする長所が発揮しにくい状況にあった。本年度、新しいクラス編成で昨年とは違う環境の中にありながら、比較的安定して学校生活を送ることができるようになってきている。発作という障害を少しでも軽減しながら本児が自分自身の持つ力を発揮しつつ、生き生きと学校生活を送って欲しいという願いを持ってこのテーマに取り組んできた経過について述べてい。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- 昭和57年12月22日生 7歳10ヶ月 男子 小学部2年生
- 分娩時に異常はなく、発育状態もほぼ良好であった。
(首のすわり3ヶ月、発歯11ヶ月、歩き始め12ヶ月)
- 2歳の時、熱性けいれんにかかり3ヶ月入院し、そこでてんかんと診断される。(国立療養所西鳥取病院にて)
- M保育所にて2年保育の後、平成元年本校に入学する。

(2) 発達検査等による実態

①遠城寺式乳幼児発達検査(平成2年5月実施)

移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発 語	言語理解
3 : 4	3 : 4	3 : 0	2 : 9	2 : 9	2 : 3

- 運動面に比べ言語面の遅れが見られる。

②MEPA(平成2年5月及び10月実施)

- 第4ステージ(19～36ヶ月粗大運動確立ステージ)を通過中である。

- 運動・感覚分野においては第4ステージを通過し第5ステージの充実もねらえるが、言語、社会性の分野では遅れが目立つ。

③からだのこなし輪郭表(平成2年5月実施)

- 遊び・道具や運動の項目で他より優れているが、手指の機能や道具の操作・探索の項目では2歳～3歳の段階と落ち込みが目立つ。

7	61-72	28	28	28	26	26	28
6	49-60	27	27	27	25	25	27
		26	26	26	24	24	26
		25	25	25	23	23	25
5	37-48	23	22	22	21	21	23
		22	21	21	20	20	22
		19	19	19	17	17	19
		18	18	18	16	16	18
		17	17	17	15	15	17
4	19-36	16	16	16	14	14	16
		15	15	15	13	13	15
		14	14	14	12	12	14
		13	13	13	11	11	13
		12	12	12	10	10	12
3	13-18	11	11	11	9	9	11
		10	10	10	8	8	10
		9	9	9	7	7	9
2	7-12	8	7	7	6	6	8
		6	6	6	5	5	6
		5	4	4	3	3	5
1	0-6	4	3	3	2	2	4
		3	2	2	1	1	3
		2	1	1	0	0	2
		1	0	0	0	0	1
分野		運動・感覚	言語	社会性	知能	身体	社会性

氏名	A・Y	性別	57年 12月 22日生
第1回測定	H2年 5月 11日	年齢	満 7歳 5ヵ月
第2回測定	H2年 10月 11日	年齢	満 7歳 10ヵ月

(3) 行動特性

- 月に3～7回の割合で発作が起こる。多くは睡眠から目覚める時（朝起きる時または帰宅後の昼寝の後など）に起こりやすい。
- 机上学習や学習内容に興味のない時はぼんやりとしてしまいがちであるが、からだを動かしたり好きなことに対しては意欲的に取り組むことができる。
- 手指の機能が未分化のため指先を使っての作業や衣服の着脱などの技能面での遅れが目立つ。
- 社会性の分野で優れており、人との関わりを積極的に持とうとする。

2 個人目標

個人目標 持っている力を少しでも発揮して安定して生き生きと活動する子

つけたい力

- ・衣服の着脱、排泄などにおける身辺自立の技能の定着及び向上。
- ・自分の言葉で、または模倣により自分自身を表現しようとする力。
- ・少しでも長い、一つの活動に熱中してがんばろうとする力。
- ・上半身（特に上腕）の強化。
- ・快・不快に対する感覚の獲得。

からだ像

好きなことを通して生き生きとからだを動かすことを楽しむ子

仮説 てんかんの発作という障害を持つ本児の場合、薬の作用から日常生活においても精神的な虚脱感が見られ、同時に身体的にも活動が不活発となる。そのため常に刺激を与えて身体を動かすことが本児の活動の基本となり、その結果、脳の刺激を誘発して精神面の働きも活発なものとなってくる。本児が熱中して取り組める興味のある活動を用意することによって、その取り組みの中でからだを動かすことを楽しむことができると考える。

3 指導の方針

- (1) 好きな遊びや興味のある活動を中心に、本児が進んで取り組みやすい場を多くし楽しく生活できるようにする。
- (2) 人との関わりを積極的に求めていくという本児の持つ社会性を生かして、友だちがやっていることをモデルに模倣を中心として、できることをひとつでも多くしてできた喜びや自信を送らせる
- (3) 家庭及び医療との連携を密にして、安定した生活リズムの確立に努め、できるだけ発作の少ない生活を保障する。

4 指導の実際

(1) リズム・サーキットによる実践

リズム・サーキットは一日の生活の中で決められた帯時間に児童にからだを動かすことを保障する活動の場である。生活の一つのリズムになっているこの活動は、からだを動かすことを好む本児にとって無理のない形で楽しみながら運動する時間となり、また友だちと一緒にいることで友だちのすることを見ながらがんばってやろうとする意欲にも自然につながる場となる。更に2学期より午後の活動となったので、本児にとっても一日のうちにからだを動かしやすく、持っている力を発揮しやすくなった。以下にその経過を示すが特にその変容の見られる3つの活動についての実践を記す。

運 動	始めの様子 (5月)	手 だ て	その後の様子 (10月)
・あひる歩き	<ul style="list-style-type: none"> ・全体重を補助者の持つ棒にかけ、時には棒にぶらさがることが多かった。 ・足の裏全体をつけたベタ足歩きであった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・棒をできるだけ高くして、棒にかかる負荷をできるだけ少なくする。 ・「あひる」の歌を歌ったり、「つま先で歩こうね」「あひるさんになってがんばって歩こうね」などの言葉かけを多くする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わずかではあるが、自分で体重を支えて歩ける場面もでてきた。 ・足の裏全体をつけたベタ足歩きから時々足の裏の外側をあげて歩く場面がでてきた。 ・待機の間、または歩きながら「あひる」の歌を歌っていることが見られるようになってきた。
・おさるのかごや	<ul style="list-style-type: none"> ・棒は握ってはいるが、半分程度は体重保持の援助をしてもらいながらのぶらさがりであった。 ・足をだらりと伸ばした姿勢でぶらさがっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少しずつ補助を少なくする。 ・励ましや「足を曲げて」などの言葉かけをする。 ・「おさるのかごや」の歌を歌い、楽しい雰囲気の中でぶらさがりができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・援助なしでひとりで棒を握り、20秒程度ぶらさがりができるようになった。 ・活動に見通しができて、名前を呼ばれるとさっと用意ができ、意欲的に取り組もうとする態度が見られるようになってきた。
・ぶらんこ	<ul style="list-style-type: none"> ・全身に力が入っており、顔の表情にも堅さが見られ、揺られることに対して恐怖感があった。 ・頭が下にそってしまい、首が据わらなかった。 ・くすぐりに対しての期待感がなく、くすぐられても快の表情が見られなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・からだを揺る時、本児の顔と常に対面している状態で「ぶらんこ」の歌を歌ったり、言葉かけをして揺られることに対して安心感を与える。 ・友だちのくすぐられている様子を見たり声かけをして、くすぐりへの期待感を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・からだ全体の緊張感が少しずつなくなり、力を抜いて揺られるようになった。 ・顔の表情の堅さが少しはとれて、時には揺られながら「ぶらんこ」の歌を歌うことも見られるようになってきた。 ・首を据えて揺られることができるようになった。 ・くすぐられる時、顔の表情に少しは笑みが見られ、くすぐりに対しての期待感がでてきた。

活動の中で技能面で目に見えて大きく変容した部分は少ないが、名前を呼ばれると大きな声で返事ができるようになったり、手押し車やぶらんこでは自分からさっとその活動を行う態勢で待てたりなどのそれぞれの活動に対して見通しを持ち意欲的に取り組むことができたことは本児にとって大きな変容であると言える。また、それぞれの活動のリズムや雰囲気作りの役割をしている「おさるのかごや」や「ぶらんこ」の歌を歌ったり、待機の間、隣りに座っているＴ児（クラスの中で本児が一番関わりを持つ対象）と時にはふざけあったり楽しみながら活動に参加できた。リズム・サーキットが本児にとって楽しんで取り組める活動の一つになったのではなかろうか。

(2) 遊びを通しての実践

本児の場合、ある程度自分でやりたいことを見つけて遊ぶことが可能であるため、できるだけ本児の好きな遊びを中心に少しずつ遊びの幅を広げていくことをねらって指導してきた。4月当初は絵本を見たり乗り物のおもちゃでの遊んだりといったひとり遊びが中心であったが、徐々に友だちの遊んでいるものに興味を持ち始め、ひとりであるいは友だちと一緒に新しい遊びが活動に加わるようになった。H



子の好きなしゃぼん玉遊びを見て「ぼくもやりたい」と一緒にしゃぼん玉をしたり、T児がやっているパズル遊びに参加しようとしたりの遊びの種類の変化や、積み木や絵カードでの単に並べるだけの活動から積み上げたり絵で遊んだりといった内容の質的な変化が見られるようになってきた。指導の手だてとしては、声かけや遊びの場を意図的に設けることなどが主であったが本児の人と関わりを持とうとする社会性が、友だちのしていることの模倣につながり、活動に幅や変化を持たせたと思う。好きな遊びを通しての活動ならかなりの間熱中して取り組むことができ、本児にとって一番安定した場となりえたのではなかろうか。

(3) 家庭及び医療との連携による発作の防止の取り組み

できるだけ発作の少ない生活を送らせるために学校・家庭・医療とのパイプをしっかりとつなぎ、常に三者で本児の体調や生活の様子についての実態を把握するものとした。その方法として病院ノート（家庭及び学校での発作の様子と時間、投薬などについての記録）の活用や生活ノートにおける家庭での食事や睡眠などの記載を中心に行ってきた。学校でも体調をその都度チェックする、からだを動かした後の休息の時間をしっかり確保するなど無理のない生活リズムの確立に努めた。その結果、本年度の場合、家庭での発作回数も6月以降減少し、学校でも本児の行動の特徴でもある、午前中ぼーとした状態が続き午後から活動が活発になるという生活のリズムが変わり、午前中から比較的落ち着いて活動に取り組めるという良い状態が続いている。

5 今後の課題

唯一の新入生で新しい環境に慣れさせることが先決となり、どちらかと言えば過保護になりがちであった昨年に引き続き本年度も更に新しい学級集団でのスタートとなり本児にとっての精神的負担が予想された。しかし予想に反してこの小集団は本児の明るくやんちゃな面を引き出すプラスの効果を持ち、今ではクラスのムードメーカーとして時にはいたずらの大将として活躍している彼の姿が見られるようになってきた。医療とのつながりということが第一ではあるが、発作を恐れず人との関わりの中でいろいろなことに挑戦する場を与えて、その上でできることを少しでも増やしていき楽しみながら充実した学校生活を送ることができるよう引き続き指導を行っていきたい。